竹千代賞

しんゆう

辻　日菜子

わたしのしんゆうのはなしをします。

麦茶をこぼして乾いたままの、しわしわの日記帳に書いてあった。親友という言葉を覚えたばかりの七歳の私の、その単語を使いたかっただけであるのが透けてみえている恥ずかしさは苦く、本棚の奥の奥から出てきた日記帳の香りが甘かった。日記のそのページには先生のペン、当時は先生しか持っていないと思っていた朱色のサインペンで、はなまると、「すてきですね。」と書いてある。眼を閉じればその時に戻ってしまうみたいに曖昧なのは、庭の鈴虫が騒がしいからだろうか。急いで日記帳を閉じる。机の上にあるスマホを手に取り、カメラを起動して内カメにする。映っているのが高校生で安心した。そのまま前髪を軽く直し、リップを塗りなおそうと決めて、浮かれている自分ににやけてしまった。親友はひらがなの方が恥ずかしくないかもしれない。

名まえはゆうみちゃんです。いま三ねんせいだから、いっこおねえさんです。

前に会ってから、ほとんど二年経っていた。去年、優実ちゃんは大学受験で忙しくて、私の家から歩いて五分くらいの家まで行ってポストに手紙と御守りを入れて帰ったのを覚えている。その日の夜にお礼の電話がかかってきて、そのまま少しだけお話をした。今年は私が受験生なので、まだ当分会えないかもしれない、と思っていた。赤色のリップを塗りなおし、家を出る。今から優実ちゃんに会いに行く。

すごくやさしくて、だいすきです。けんかもしません。

実際彼女は優しかった。こちらが不安になるほどだった。お揃いで買おうと私が決めた、四百円くらいの安っぽいネックレスを、その後遊びに行くたびに付けてきてくれた。誰かが誰かの悪口を言っていても、決して混ざらなかった。携帯のフィルタリングが厳しくて、流行りものの話はできないことの方が多かったけど、その純粋さも好きだった。赤信号だったので立ち止まる。ビニール袋をしっかりと握りなおす。中にはオープンキャンパスで京都に行ったときに買った八つ橋の箱と、小さな袋に入った練り香水。京都にいる時から、渡しに行くのが、会えるのが楽しみだった。優実ちゃんの家の屋根が見えてきたところの角を曲がると、本のページを勢い良くめくるような音がした。驚いて音がした方を見上げると、数え切れないほどの黒い鳥が一斉に飛びたっていた。肌が粟立つような感覚を覚えて、速足で優実ちゃんの家の前まで向かう。大勢に見られているような不快感は、あんなに楽しみだった扉を目の前にしても、インターフォンに手をかけても手放せなかった。引き返すわけにもいかない。何よりずっと楽しみにしていた。大学生になった優実ちゃんに会うのは初めてだったことを今更になって思い出す。十五分ほど前まではわくわくして仕方なかったのに、いざとなると余分な思考だけが速く回っているのが、なんだかすごく意気地なしみたいで嫌だった。深呼吸してインターフォンを鳴らす。

「はい！」

優実ちゃんの声だ。ドアが、開いた。

いっしょにおしゃべりするのがすきです。
「祥子ちゃん！　久しぶり、会えて嬉しい！　良かったら上がっていかない？　時間ある？」
優実ちゃんだった。優実ちゃんの匂いで、優実ちゃんの服で、優実ちゃんの眼鏡で、優実ちゃんの声で、髪だけが少し伸びていた。ただ、本当に、優実ちゃんだった。先程までの不安な気持ちはもう思い出せなかった。恥ずかしいけど、少し泣きそうだった。お言葉に甘えてお邪魔させてもらう。
「本当に久しぶりだね。先にお土産渡しちゃうね。」
これもまた変わっていない優実ちゃんの部屋で、向かい合って座る優実ちゃんに紙袋を手渡す。ありがとう！　と弾む声が聞こえる。些細なことだが、私はその喋り方が好きだった。一つ一つの音をこぼさずに発声するみたいな、「ありがとう」の「う」まではっきりと聞き取れるその話し方が、真っ直ぐな優実ちゃんにぴったりだと思っていた。
「私も祥子ちゃんに渡したいものあるの。」
にこにこしながら紙袋を渡された。見てみて！　と言われるまま袋の中を覗く。暗くて見づらかったので中身を取り出すことにする。私の好きなチョコレートのお菓子と、私の好きな色のハンカチが入っていた。袋の中をもう一度見ると、紙のようなものが入っていたのでそれも取り出す。それは、折り紙で出来た御守りだった。優実ちゃんを見ると、咲いたように笑っている。私は嬉しくて仕方がなくて、ついに少し泣いてしまった。のどや胸のあたりがくすぐったくて温かかった。優実ちゃんは驚いた顔をしたあと、優しく笑った。
「今大変な時期だよね。」
頷いて、涙を拭う。高校生にもなって人前で泣いてしまったのが恥ずかしくて、口を開く。
「大学生ってどんな感じ？」
優実ちゃんは楽しそうにいろいろな話をしてくれた。学食がおいしいこと、キャンパスが広いこと。優実ちゃんが嬉しそうなのが私も嬉しかった。でもさ、と言う優実ちゃんに向き直る。

「なんか先輩がすごいえらそうでさ、うざいんだよ。何様って感じ。」

熱血気取りなのかな、という優実ちゃんの声が、私の気管に詰まった。気のせいかと思った。そこからはあまり覚えていない。人を揶揄するのも見たことがないのに。気がついたら帰り道を一人で歩いていた。手に持っていた紙袋は、信じられないほど軽かったが、中身はちゃんと入っていた。優実ちゃんは人を傷つける言葉さえも知らないと、本気で思っていた。どうやら、大学生になるとフィルタリングは外れてしまうらしい。

ぼんやりと家についた。紙袋を机に置いて、体を投げ出すみたいにソファーに預けると、紙袋は机の上で倒れて、中身が出てきてしまった。紺色のハンカチとチョコ菓子に、折り紙の御守り。何気なく御守りを手にとって透かしてみる。何か見えた気がして、開いてみることにする。中には、思った通りというべきか、手紙が書いてあった。恐る恐る目を通した後、何度も、何度も読み返した。小学生の頃から毎年送られてくる年賀状と同じ文字だった。御守りを濡らしたくなかったので、机に置きなおした。涙が止まらなかった。手紙から御守りに戻そうとすると、折り目がきっちりついていたおかげで、思っていたより簡単に戻すことができた。きっと優実ちゃんは私が開いて折りなおすことを思って折ってくれたのだろう。大丈夫、大丈夫。思えばさっきの優実ちゃんの言動はぎこちなかった。周りに合わせて変わってしまっただけかもしれない。手の甲で涙を拭う。もらったばかりのハンカチは使えなかった。携帯を見ると、優実ちゃんからのメッセージが来ていた。優実ちゃんのアイコンは前からずっと同じ、私とのツーショットだった。大丈夫、優実ちゃんは優実ちゃんだ。きっと、きっと。

これからもずっとなかよしです。　すてきですね。